

創世記12－13章「約束の地への信仰」

1A カナンの地への移住 12

1B 祝福の器 1－3

2B 従順と礼拝 4－9

3B 信仰の後ずさり 10－20

1C 生き残りの企み 10－16

2C 主の守り 17－20

2A 甥ロトとの別れ 13

1B 初めの愛 1－4

2B 譲るアブラハム 5－13

1C 証しの危機 5－7

2C 低地を選ぶ甥 8－13

3B 信仰による踏み止まり 14－18

本文

創世記 12 章を開いてください。ついに私たちは、神のご計画の心臓部分に入っていきます。それは、アブラハムに対する祝福の約束と契約です。この約束をもって、神は、アダムまたノアに与えた祝福を、国々が分かれている中で達成されていくという目的を持っておられます。聖書の書かれた時代、そしてその後の世界、そして今から将来に至るまでの指針のすべてが、12 章から始まるからです。

1A カナンの地への移住 12

1B 祝福の器 1－3

¹ 主はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。² そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。³ わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

午前礼拝で学んだように、ここに至るまでの経緯がとても大切です。主が、天と地を造られ、人を造られて祝福されました。けれども、罪を犯して、土地がのろわれたものとなりました。それから、ノアの時代到大洪水があり、主は再び、生めよ、増えよ、地を満たせと言われました。ところが、一つの言語であったために、一つになって集まり、町を建てて、自分たちの名をあげて、天に届く塔を建てようとしていました。異なる神々を、偶像を拝むようになりました。それで主が言葉をばらばらにされたのですが、それで一つの家族であったところから、国民が分かれ出たのです。

バベルあるいはバビロンがある、シンワルの地にウルという町があり、そこにいたアブラムに、主は、その地から出ていきなさいと召し出されたのです。また、家が偶像礼拝を行っていたので、そこから出ていきなさいと言われたのです。

その命令に従った後は、主は一方的に、「わたしはあなたを祝福する」と約束されています。あなたがこうしたら、わたしはこれをする、とは言われていません。一方的に、わたしはあなたを祝福すると、主語がずっと主なる神ご自身なのです。神の恵みによって、アダムの中から行われたかった人への祝福を、ここで今、アブラハムにあって行おうとしておられます。

そして、この無条件の約束があるからこそ、今後の約束の契約の基となります。終わりの日における完成の幻となっています。モーセによって、主は後に契約を結ばれますが、アブラハムが主に聞き従ったように、イスラエルの民が聞き従うならば、宝の民にすると約束されています。そして、ダビデの時に、王国が彼の世継ぎの子から永遠に確立されると約束されます。大いなる国民とすると、主はアブラハムに約束されていますが、それは永遠の神の御国です。

そして、イスラエルが主に聞き従わず、モーセによる神の契約を破ったので、主は一方的に、心に律法を置くといわれて、彼らの罪を赦す新しい契約の約束をされました。それが、キリストの流された血潮によって結ばれ、今、私たちはその恵みにあずかっています。

後に、このアブラハムへの約束が、彼の子孫が星の数のように多くなるということ。また、カナンを彼が所有するということがわかってきます。これはとりもなおさず、アダムに対する神のお約束で、生めよ、増えよという祝福命令であり、また、地を支配しなさいという命令の延長なのです。そして罪を犯して、「女の子孫が蛇の子孫の頭を打つ」という、救いの約束がありますが、アブラハムの子孫に、その救い主、キリストの約束が与えられます。

アブラハムによって、ご自分の召しと約束による、神ご自身の国民を、異教の神々を拝んでいる国民の間で起こし、それで、諸国民が分かれ出た中で、新しい国民によってご自身を証しするようになされました。アブラハムから、ご自身の祝福が流れ出て世界に及ぶようにされたのです。

これから、確かにアブラハムが祝福されていくのを見ます。また、大いなる名となるとありますが、アブラハムがこれから出てくる子たちの族長になります。そして、その広がりにはイスラエルという国民となり、さらに、アブラハムの名はイエスを信じる異邦人たちにも広がるのです。そして、アブラハムの兄息子イシュマエルが、アラブ人の父祖と言われていますが、彼らの間で、イスラム教の間でも、アブラハムの名は知られています。

彼が、不妊のサラを妻としていることに注目してください。子を多く生むからこそ、族長としての名

が残ります。子が生まれ、そしてその大きな家族が氏族となり、部族となり、そして国民となっていきます。それで族長の名は残され、しばしば町の名にさえなります。しかし、アブラハムには、そもそも子を産まない妻しかいないのです。そのような夫婦に、神が、大いなる名となり、大いなる国民となると言われたのです。聖書の話は、こういった名もなき人、力のない人、何でもない人にところに、主が来られ、引き上げられる証しに満ちています。

アブラハムの名については、人々が彼の名を唱えるのみならず、何よりも、神ご自身が、「アブラハムの神」として、ご自身を人々に示されました。彼の子イサク、その子ヤコブと共に、主は、「**彼らの神と呼ばれることを恥とнаさいませんでした。**」と、ヘブル 11 章に書いてあります(16 節)。

そして、「大いなる国民」についてです。イスラエルは、ほんとうにわずかな人々です。ヤコブの家族が七十人、エジプトに下り、そこから始まりました。ところが、大国エジプトの中で、「**出エ 1:7 多くの子を生んで、群れ広がり、増えて非常に強くなった。こうしてその地は彼らで満ちた。**」それで、ファラオが過酷な奴隷としての労役を課しますが、ますます増えます。そしてヘブル人の男の子をナイル川に投げ入れよとまで命じますが、結局最後は、この弱小イスラエルに、世界の超大国のエジプトの精鋭部隊が、紅海の中で溺れ死ぬのです。神の力強い腕が証しされます。これも同じで、何でもない、名もなき、弱い集団を神は選ばれて、ご自分の力強さを証ししておられます。

そして、アブラハムが祝福となると約束されます。アブラハムと共におられて、アブラハムに害を加えるものなら、自分が害を受けるようになります。主がともにおられ、主がアブラハムと一つになられて、ご自身の祝福を流し出す器とされるからです。

これから、アブラハムの生涯で、彼に害を与えようとするものが害を受けるのを見ます。神が守り、神がともにおられるからです。神が味方になっておられます。そして今、話したように、イスラエルの民も、エジプトのファラオに、その生まれた男の子がナイル川に投げ込まれましたが、紅海において、エジプトの精鋭部隊とファラオ自身が、紅海という水の中で溺れ死にました。

そして、彼らは自分たちの罪により、約束の地から引き抜かれましたが、しかし、彼らを虐げる違法の国々は、ことごとく裁かれました。バビロンがそれです。主はイスラエルを懲らしめるために、バビロンを裁きの器として用いられましたが、イスラエル人に対して行ったことは悪であり、容赦なく、主はバビロンを滅ぼされました。

その後、ユダヤ人を世界離散に仕向けたローマですが、その帝国は滅びました。スペインは中世にユダヤ人を国外追放し、異端審問にかけましたが、超大国の座から降りて、小国になりました。ポグロムと呼ばれる迫害をユダヤ人に行ったポーランドばかり、また、ホロコーストを行ったナチスドイツは、戦争で敗れました。イギリスも、ユダヤ人の帰還運動を実質やめて移民制限してか

ら、大英帝国の座から降りて、小国となりました。

つまり、アブラハムの生涯においても、聖書の時代にイスラエルにおいても、また今のイスラエルに至るまで、ここでの、「あなたを祝福する者を祝福し、のろう者をのろう」がそのとおり、起っているのです。

そして大事なのは、「地のすべての部族は、あなたによって祝福される」であります。これが、最終的な目的です。主は、アブラハムを立て、イスラエルを立てたのは、彼らによって祝福が全世界に広がるためです。これで、アダムが罪を犯した時以来の、すべての人に対する神の祝福のご計画が完成します。私たちは今、キリストにあってこの祝福を御霊によって与えられている者たちです。「ガラ 3:14 それは、アブラハムへの祝福がキリスト・イエスによって異邦人に及び、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるようになるためでした。」今でこそ、イスラエルの人たちの大半が、福音に対して頑なですが、しかし、今度はイスラエルが立ち直ることが預言されており、それで、すべての人が神の憐れみを受けるようになります(ロマ 11:30-32)。

2B 従順と礼拝 4-9

⁴ アブラムは、主が告げられたとおりに出て行った。ロトも彼と一緒にであった。ハランを出たとき、アブラムは七十五歳であった。

前回、お話ししましたが、アブラムはウルの地にいる時に、1 節から3節までの、主のことばを聞いていました。ステパノがサンヘドリンで弁明をした時に、そう弁明しています(使徒 7:2-3)。父の家を離れなさいと言われたのに、父テラとともに出ていきました。アブラムの行動に、責めることはできません。父の世話をしなければいけないのに、置き去りにはできません。けれども、それでも、主に任せて、信じていくことが必要です。父テラが死ななければ、月の神を拝むハランから出られなかったのです。彼が死んでから、主が再びアブラムに語り、それで彼らは出ていきました。

アブラハムの生涯は、信仰の英雄のそれではなく、「神の恵みによる信仰の成長」であります。神はアブラハムに良くしてくださいます。それで彼は、その真実を知り、それで神への信頼を増し加えます。大事なものは、主が正しい方、真実な方で、その方を信頼することこそが、正しい生き方なのということです。自分が何をしたかではないのです。主がどうしてくださるか、ということを知ります。そうすれば、自ずと主に聞き従うことができるようになります。

信じるとは何か？ここに、定義みたいのがあります。「主が告げられたとおりに出て行った」であります。主を信頼する心を持ちながら、その御声に聞くことです。だから、ただ頭で理解して聞くのではなく、信頼しているので従うのです。山で遭難して、地元の人に出会い、その人の案内でふもとに降りてくるようなものです。信頼して、その姿についていきます。ノアの時もそうでしたね、主が

箱舟を造りなさい、箱舟に入りなさい、箱舟から出てきなさいと言われたときに、「すべて主が命じられるとおりにした」とあります(7:5)。

では、「ロトも彼と一緒にあった」とありますが、ロトは、すでに父ハランが死んでおり、それで、アブラムは彼を自分の息子のようにみなしていたと思われます。けれども、アブラムのように主に命じられて純粋に従ったどうかわかりません。むしろ、おじが出ていったから自分もついていったという面があります。

というのは、後で、ロトは、神の約束ではなく、とても肥沃なヨルダンの低地に住むことを決めたからです。目に見えてよいところを選んだのです。目に見えなくとも、主が言われたからという理由だけで従ったのではなく、一緒に行ったという面があったことでしょう。ですから、私たちは、同じことをしていても、果たして信仰によってしているのか、ただほかの人たちがしているから、しているというのでは、後で大きくその違いが、行いの実として見えてくるのです。

そして、「アブラムは七十五歳であった」とあります。すでに年老いていることを示しています。さらに、もっと年を取ることが、16章の最後、17章の初めに見えてきます。イシュマエルが生まれたのが86歳。けれども、彼ではなくサラからの男の子が約束の子だと言われるのが99歳です。それで100歳でイサクが生まれます。死んだも同然でも、主がそこからのちを与える証しを、彼は立てていきます。神がいのちの神であり、復活の神であることを暗示します。

⁵ アブラムは、妻のサライと甥のロト、また自分たちが蓄えたすべての財産と、ハランで得た人たちを伴って、カナンの地に向かって出発した。こうして彼らはカナンの地に入った。

アブラムは、財産においても祝福を受けています。「ハランで得た人たち」というのは、奴隷のことです。ただ、今の奴隷の意味とは異なり、当時は、会社のような組織がなく、もし自分が生きていくならば、住み込みの雇人のようにして、ある主人のところに留まるのが普通でした。

そして示されたところが、「カナン」の地です。9-10章で学びましたが、カナンがのろわれよとノアが宣言した人々です。しかしそれは、アブラハムの時ではなく、四代目の人々がエジプトから約束の地に戻り、そこで追い払うようにイスラエルに命じられます。

⁶ アブラムはその地を通して、シェケムの場所、モレの榿の木のところまで行った。当時、その地にはカナン人がいた。

アブラムは、シェケムまで来ました。シェケムは、ダンからベエル・シェバまでのイスラエルの地において、ほぼ真ん中に位置する町です。今は、パレスチナ・アラブ人たちはナブルスと呼んでいます。

す。私はそこに訪れたことがあります、自動車修理工場でしょうか、そのような建物に囲まれるようにして、カナン時代のシェケムの遺跡があります。

後に、ヤコブがマハナインからヤボク川沿いに歩き、ペヌエルで御使いと格闘して、エサウに会います。それから彼がシェケムに行き、そこに一時、定住します。アブラハムも、ハランからの旅は、まず、ヨルダン川の東に南下し、それかヤボク川沿いを西に歩き、ヨルダン川を越えて、そのまま西に行き、シェケムに向かったと思われます。

そこに、「**モレの榿の木**」がありました。榿は、15 呎ぐらいの高さがある木ですが、今もイスラエルに行けば、その暑い気候の中で、日差しを避けるために自然に、木陰に行き、涼みます。カナン人は榿の木の下で、偶像礼拝を行い、忌まわしいこともしていました。イザヤの預言には、イスラエルもその行いをしたことを、主が咎めています。「57:5 **あなたがたは、榿の木の間や、青々と茂るあらゆる木の下で、身を焦がし、谷や、岩の裂け目で子どもを屠っているではないか。**」

つまり、アブラムは、カナン人が多く住むところに、何か場違いのところに來てしまったと言う感じです。そして、日差しを避けるも、そこには、グロテスクな偶像が置かれていたかもしれません。しかし、興味深いのは、「モレ」というのは、そのまま「教師」という意味のヘブル語です。主が、教えられるのです。

⁷ 主はアブラムに現れて言われた。「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える。」アブラムは、自分に現れてくださった主のために、そこに祭壇を築いた。

主は、すごいお方です。主が語られる時に、私たちはとても良い環境のところで語られたいと願いますね。例えば、ステンドグラスのある美しい教会堂で、祈りで静まっている時に、主が語られたみたいなのを、思い描いてしまいます。けれども、偶像を拝んでいて、いかがわしいお店も目の前にある時に、そこで、慰めのことばを主が語りかけられるということなのです。

そして、カナン人が住んでいるのに、そのど真ん中で、「**わたしは、あなたの子孫にこの地を与える**」と言われるのです。アブラハム本人というよりも、その子孫にこの地を与えると言われていきます。そうすると、彼に子が与えられるということです。妻のサライが不妊なので、これは二重に考えがたい約束です。

そしてアブラムは、アダムとエバの息子、アベルと同じように、またノアと同じように、祭壇を築き、いけにえを献げています。ノアは、大洪水から救ってくださった方に感謝するために、箱舟から出てきた時に、いけにえを献げました。ここでは、主が現れてくださったことに、感謝して、いけにえを献げました。主が現れ、語ってくださり、それで応答して、感謝の現れとして礼拝するというのが、

私たちキリスト者の霊的な営みです。

⁸ 彼は、そこからベテルの東にある山の方に移動して、天幕を張った。西にはベテル、東にはアイがあった。彼は、そこに主のための祭壇を築き、主の御名を呼び求めた。

シェケムにはカナン人が住んでいました、そこで天幕を張ることさえできなかったのでしょう。ベテルは、シェケムよりも大体、60^{キロ}南に下るとベテルの遺跡があります。アイはすぐ東にあります。その間のところに、ようやく天幕を張れるところがあったのでしょう。

そして再び主のために祭壇を築きます。そして、「主の御名を呼び求めた」とありますね。これは、カインがアベルを殺した後に、セツをアダムとエバが生み、セツの息子エノシュの時から、「人々が主の名を呼ぶことを求めた。(4:26)」とあります。アブラムは、この信仰を継承しているんですね。そして、バベルの人々と対照的です。彼らは自分たちの名があげられるようにしていました。しかし、アブラハムは、自分の名を主が大いなるものにすると言われましたが、彼自身は、主の名を呼び求めたのです。ですから、祝福の器になれます。彼が高められても、彼は主を高めているので、彼の周りには、主の支配が広がるのです。

⁹ アブラムはなおも進んで、ネゲブの方へと旅を続けた。

彼は、落ち着く場所がなかったのでしょう。カナン人が住んでいて、しかも縁のあるところに住んでいます。それで、彼はずっと南下します。ベエル・シェバまでくると、そこからネゲブが広がります。荒野です。

3B 信仰の後ずさり 10－20

1C 生き残りの企み 10－16

¹⁰ その地に飢饉が起こったので、アブラムは、エジプトにしばらく滞在するために下って行った。その地の飢饉が激しかったからである。

普通の時でさえ、ネゲブは雨量が非常に少なく、その最も北にある、ベエル・シェバがぎりぎり人の住めるところと言われていました。その上で、飢饉が起こりました。これでは住むことができません。そこで、ネゲブは、ずっと南に行けばエジプトがあります。そして、エジプトは肥沃な地です。ナイル川があるからです。それで、彼は、そこにしばらく滞在することに決めました。

しかし、それは、主の約束された地から離れることを意味します。これから、イサクの生涯において、決してそこから離れさせないという決断を、アブラハムは行っています。ヤコブは後に、ヨセフがエジプトにいるということで南に下ろうとしましたが、ベエル・シェバで、いけにえを献げています。

それは、エジプトに下るのが本当に良いことなのか？と思いとどまったからです。しかし、その時には主は、エジプトに下ることは恐れてはいけない、そこで大きな国民にすると約束されました。

これから見ると分かりますが、エジプトというのは、神を恐れ、信じる者たちにとっては、世の思ひ煩い、富の惑わしのある、いわゆる「世」そのものであることが分かります。イスラエル人がエジプトから贖い出されるのは、私たちが世から、その誘惑から救われることを意味しますし、南ユダ王国が、アッシリアやバビロンからの脅威に対抗するためエジプトに頼ろうとするのを、神は、頼りにならないエジプトとして、強く戒めています。

飢饉が激しいということで、エジプトに行くのは現実的な策かもしれません。私たちの生活で、これをするのは現実的だということがあります。けれども、本当に現実的なのか？であります。そこから出てくる、後々に、いろいろな棘のようにして、痛みが残ることになります。自分自身を救おうとすると、それを失うとイエスは言われました。けれども、主のゆえに、福音のゆえに、神の言われることを信じて、生存本能とは異なることをやっても、それで主が憐れんでくださるという、主の備えがあるのです。

¹¹ 彼がエジプトに近づいて、その地に入って行こうとしたとき、妻のサライに言った。「聞いてほしい。私には、あなたが見目麗しい女だということがよく分かっている。¹² エジプト人があなたを見るようになると、『この女は彼の妻だ』と言って、私を殺し、あなたを生かしておくだろう。¹³ 私の妹だと言ってほしい。そうすれば、あなたのゆえに事がうまく運び、あなたのおかげで私は生き延びられるだろう。」

ここで、アブラムの失敗は、「エジプトに近づいて」というところすでに始まっています。彼が、神に命じられて、その約束のところに留まっている時には、御霊が働いてくださっていて、世の考えから守られています。けれども、そこから離れて、自分で動こうとする時に、もうすでに遅いのです。これまでの自分の古い考え方、世の考えが自分に入ってきてしまいます。神によって生きるのではなく、自分自身を生かそうとする力が働くのです。

アブラムは、自分が生き残る方法を考えました。エジプトなど異教の世界では、見目麗しい女がいたら、凌辱して、無理やり自分の妻にすることもよくあります。後に、シェケムで、ヤコブの娘ディナが凌辱されて、その犯人は、その族長の息子で妻にしたいと言いました。エジプトにおいても、見目麗しいということで、夫を殺すということは、十分に考えられることでした。

そこでアブラムが考えたことは、彼女を妹ということです。彼女は事実、母親は違うけれども、同じ父を持つ妹でした。けれども、半分の真実は嘘です。そう偽れば、自分自身は殺されずに済みます。また、妹の兄ということで、彼女が召し入れられたら、結納金を受け取ることができます。そ

うやって、私に真実を尽くしてくれとサライに頼むのです。

今では、到底考えられないことですが、ロトがソドムで、旅人を集団レイプ魔から守るために、自分の未婚の娘を差し出すと交渉をしているのです！（19:8）女の尊厳が相当、低められた文化が異教にはありました。アブラムが、そのような考えに陥ってしまっているのです。

しかし、ここではそうした、道らなぬこと以上に、彼が犯した過ちは大きいのです。それは、彼の妻、サラから約束の子が生まれるように神がしておられたからです。サラの胎が他の男の子種で汚されるということになります。そうすれば、神の、アブラハムによってキリストを与え、また諸国民を祝福するという計画が台無しになるのです！私たちがキリスト者となり、救われるということもすべて、なくなっていたわけです。

¹⁴ アブラムがエジプトにやって来たとき、エジプト人はサライを見て、非常に美しいと思った。¹⁵ ファラオの高官たちが彼女を見て、ファラオに彼女を薦めたので、サライはファラオの宮廷に召し入れられた。¹⁶ アブラムにとって、物事は彼女のゆえにうまく運んだ。それで彼は、羊の群れ、牛の群れ、ろば、それに男奴隷と女奴隷、雌ろば、らくだを所有するようになった。

アブラムはすでに、かなりの財産を持っていたので、エジプトの国に来た、外国人の一行のような扱いを受けたのでしょう。それで、その女をすぐにファラオが、自分の側室にしようとします。それで、アブラムが考えていたように、彼は守られ、良くもてなされました。これなら、「事がうまく運んだ」ということになります。確かに、世の知恵を働かせれば、事は良く運ぶでしょう。けれども、それがそうでないのが、神に捕えられた人々です。

ここで、アブラムに与えられた結納の品々の中に、「女奴隷」がいることに注目してください。そこに、ハガルがいたのです。彼女はサライの女奴隷となり、彼女によってアブラムはイシュマエルを生みます。そして、イシュマエルの子孫が兄弟に敵対する者たちになっていくのです。

2C 主の守り 17-20

¹⁷ しかし、主はアブラムの妻サライのことで、ファラオとその宮廷を大きなわざわいで打たれた。

なんと災いが下ったのは、アブラムではなく、ファラオと宮廷に対してでした！彼が嘘をついているのですから、彼が問題を引き起こしたのですが、神は、アブラムを祝福するとお決めにしています。そして、アブラムをのろう者はのろわれるとも約束されました。なので、アブラムではなく、かえって、サライを寝床に入れる前に、彼らに災いを下したのです。ファラオを始め、そこにいる者たちが、女と寝るどころではない、腫物ができたとか、疾患をわずらったかもしれません。

ここが、アブラハムの祝福です。そして、キリストにあって、神は、私たちの罪ののろいをこの方に負わせ、アブラハムの祝福を私たちが御霊で注がれました。「ロマ 8:1 こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」そして、「8:31 では、これらのことについて、どのように言えるでしょうか。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」と言いました。

これを知らないといけません、この恵みにあるからこそ、真の悔い改めへと導かれるのです。「ロマ 2:4 それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。」主に良くされたこと、その慈愛に触れるからこそ、私たちは心が変わられます。その真実によって、恵みによって、私たちは、真実に思い直すことができ、神に従うことができるようになるのです。

¹⁸そこで、ファラオはアブラムを呼び寄せて言った。「あなたは私に何ということをしたのか。彼女があなたの妻であることを、なぜ私に告げなかったのか。¹⁹ なぜ、『私の妹です』と言ったのか。だから、私は彼女を自分の妻として召し入れたのだ。さあ今、あなたの妻を連れて、立ち去るがよい。」

まことの神を知らない、異教の王から、まともな叱責をアブラムは受けています。そして、主がこれをお許しになっているのでしょう。しばしば、私たちは、「クリスチャンなのに・・・」という言葉を使いますね。いやいや、キリスト者だからこそ、一般の人たちよりも愚かなことをするのは、よくあることです。これもまた、神の憐れみです。私たちが、義のゆえに迫害することは栄誉あることですが、自分の愚かさで戒められることがあれば、それは甘んじて受けましょう。

²⁰ ファラオがアブラムについて家来に命じたので、彼らは彼を、妻と、所有するすべてのものと一緒に送り出した。

なんと、ファラオはただ追い出しただけで、妻だけでなく、所有するすべてのものと送り出しています。エジプトの人々や、異教の人々は、迷信を受け入れているので、彼らに何か危害を加えたら罰が当たると思っていたに違いありません。それで追い出しています。

2A 甥ロトとの別れ 13

このようにして、アブラムは、自分の歩みは、自分のものではないことに気づいたことでしょう。飢饉があって、それで常識的に動いて、当時の風習では良くあったかもしれませんが、妻を見捨てて家を守るということまでしましたが、そうしたみみっちい自分ではないことを、主ご自身が教えられました。自分は、何でもない人間です、確かに。けれども、栄光の主が、恵みの栄光を現わすために、当時の超大国の王に災いを下すようにして、証しをされたのです。

1B 初めの愛 1-4

¹ そこで、アブラムはエジプトを出て、ネゲブに上った。妻と、所有するすべてのものと、ロトも一緒であった。² アブラムは家畜と銀と金を非常に豊かに持っていた。

本当に皮肉ですが、世の考えに陥ってしまい、失敗したアブラムは、さらに豊かにされました。主の慈愛によって、恵みによって人は成長することを、主こそが知っておられます。

³ 彼はネゲブからベテルまで旅を続けて、ベテルとアイの間にある、最初に天幕を張った場所まで来た。⁴ そこは、彼が以前に築いた祭壇の場所であった。アブラムはそこで主の御名を呼び求めた。

アブラムは、主に立ち返りました。先に見たように、シェケムで主が現れてくださり、彼の子孫がこの地を所有する約束が与えられ、そしてここベテルとアイの間で、御名を呼び求めていました。そこに戻ったのです。これは、私たちが主の愛を知って、その初めの愛に戻るのと同じです。「黙 2:4-5 けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。⁵ だから、どこから落ちたのか思い起こし、悔い改めて初めの行いをしなさい。そうせず、悔い改めないなら、わたしはあなたのところに行って、あなたの燭台をその場所から取り除く。」

2B 譲るアブラハム 5-13

1C 証しの危機 5-7

⁵ アブラムと一緒に来たロトも、羊の群れや牛の群れ、天幕を所有していた。⁶ その地は、彼らが一緒に住むのに十分ではなかった。所有するものが多すぎて、一緒に住めなかったのである。⁷ そのため、争いが、アブラムの家畜の牧者たちと、ロトの家畜の牧者たちの間に起こった。そのころ、その地にはカナン人とペリジ人が住んでいた。

神が祝福されるときに、問題が起こらないということではありません。むしろ、問題は付き物です。それをどのように対処するかが、御霊によって行うか、肉に反応するかの違いになります。

今、ロトの家畜も多くなり、牧者たちの間に争いが増えました。ここでアブラムが、まずいと思ったのは、「カナン人とペリジ人が住んでいた」ということです。これでは、まことの神を信じる者として、証しにならないと判断したのです。「自分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保ちなさい。(ロマ 12:18)」

しばしば、キリストを信じていると言っている人々の間でも、教会で自分の正しさを前面に出して、他の人たちと対立しても、それは正しいと思っています。けれども、どちらが正しいかで争っている姿を、教会の外の人たちが見たら、それこそがよっぽど、つまずきになっているのです。言い争っているのは、世の中で十分です、教会においては、キリストのからだは、その各部分が調和して、

互いに尊んで、仕えている姿を見て、そこにキリストがおられると知るので。

2C 低地を選ぶ甥 8-13

⁸ アブラムはロトに言った。「私とあなたの間、また私の牧者たちとあなたの牧者たちの間に、争いがないようにしよう。私たちは親類同士なのだから。⁹ 全地はあなたの前にあるではないか。私から別れて行ってくれないか。あなたが左なら、私は右に行こう。あなたが右なら、私は左に行こう。」

これは本当に驚くべきことです。アブラムはロトの伯父です。であれば、ロトこそがアブラムに譲るべきです。ところが、彼は甥に譲りました。柔和な者は幸いであると、主が言われましたが、まさにそのことを実践しています。そして主に信頼しています。ロトがどちらを選ぶにしても、それは主がお決めになることだと、お任せしたのです。

¹⁰ ロトが目を見てヨルダンの低地全体を見渡すと、主がソドムとゴモラを滅ぼされる前であったので、その地はツォアルに至るまで、主の園のように、またエジプトの地のように、どこもよく潤っていた。¹¹ ロトは、自分のためにヨルダンの低地全体を選んだ。そしてロトは東へ移動した。こうして彼らは互いに別れた。

ヨルダンの低地とありますが、イスラエルの地理は、アイやベテルのあるところはサマリア山地にあります。そこから、水面下 400 呎ぐらい下がったところに、ヨルダン川が流れており、死海に至ります。エルサレムからエリコに行く時は、エルサレムは七百呎ぐらいしかないのに、一^キ〇ぐらいの高低差があります。ヨルダン溪谷と呼ばれます。

そこを見たら、とてもよく潤っていました。今は、そんなことはありません。けれども、当時は、ロトが伝え聞いていた、エデンの園のようなところであり、またエジプトの地のようであると言っています。ここが問題です。アブラムは、エジプトに下って行ってしまったことについて、神から憐れみを受けました。けれども、それにともなう結果がないということではありません。アブラムは主に立ち返ることができましたが、ロトは、影響を受けてしまったのです。彼は、信仰ではなく、目に見えるもので動いてしまいました。

私たちは、自分だけのことを考えて、信仰生活でここまでやってもいいだろうと考えます。けれども、主に任されているものが大きければそれだけ、自分自身ではなく、他者のことを愛を持って顧みないといけません。自分自身は良くても、他の弱い兄弟あるいは姉妹が、つまずいてしまうことがあるのです。だから、配慮して、敢えて行わないということがあります。

ところで、ソドムとゴモラの場所は、聖書地図では死海の南東部にあるとされています。けれども、スティーブ・コリンズという教授は聖書考古学者ですが、ここの箇所から南東部ではないだろうとし

ています。なぜなら、ベテルとアイのところから、死海の向こう側にある南東部は見えないからです。けれども、見えるのは、死海の北東部のところです。それで、トール・エル・ハمام(Tell el-Hammam¹)という、遺跡の発掘が行われているところだとしています。²

¹² アブラムはカナンの地に住んだ。一方、ロトは低地の町々に住み、ソドムに天幕を移した。¹³ところが、ソドムの人々は邪悪で、主に対して甚だしく罪深い者たちであった。

アブラムは、主が約束されたカナンの地に留まりました。けれども、ロトは、低地の町々に住みましたが、なんとソドムのほうに天幕を移します。しかし、靈的にとても危険なところです。邪悪で、主に対して甚だしく罪深い者たちです。次に、ロトがどこにいるか知っていますか？ 14 章 12 節を見てください、「**ロトはソドムに住んでいた**」。それから、19 章 1 節を見てください、「**ロトはソドムの門のところ**に座っていた」。門のところにいるというのは、その役所や裁判所、行政や司法が行われていると考えていいです。ロトは、ソドムの中心部にいたのです。

ロトは、ソドムの中にいないから、近くでも大丈夫だろうと思っていたと思います。けれども、そんなことはないのです。「**イテサ 5:22 あらゆる形の悪から離れなさい。**」主を恐れて、悪から避けるのです。自分が誘惑に耐えられると自分を騙してはいけません、自分は自分の思っているよりも、ずっとずっと弱いのです。

3B 信仰による踏み止まり 14－18

¹⁴ ロトがアブラムから別れて行った後、主はアブラムに言われた。「さあ、目を上げて、あなたがいるその場所から北、南、東、西を見渡しなさい。¹⁵ わたしは、あなたが見渡しているこの地をすべて、あなたに、そしてあなたの子孫に永久に与えるからだ。¹⁶ わたしは、あなたの子孫を地のちりのように増やす。もし人が、地のちりを数えることができるなら、あなたの子孫も数えることができる。

¹⁷ 立って、この地を縦と横に歩き回りなさい。わたしがあなたに与えるのだから。」

これで、アブラムは二人の人を失いました。一人は父テラでした。彼は神を信じない人でした。だから、彼が死ぬまでハランに留まっていなければいけません。次は、ロトです。彼は目に見えるものを求めています。だから、共に信仰に立つことができませんでした。しかし、アブラムにとって、ロトは息子自身のように愛している存在です。彼は後に、ロトのためにソドムから救われるよう、執り成しをします。彼と別れなければいけないのは、さぞかしつらかったことでしょう。

しかし、そういう時だからこそ、主は、これまでにない、大いなる幻をアブラムにお見せになったのです。今、自分の立っているところこそが、約束の地なのです。だから、北、南、東、西を歩きな

¹ <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%88%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%82%A8%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%83%8F%E3%83%9E%E3%83%A0>

² <https://youtu.be/qZPzPpiHe10>

さいと言われます。そこがすべて、彼のものになります。しかも、永久に彼のものになります。それから、子孫については、なんと「**地のちりのように増やす**」と約束されています。主は、このように信仰によって失うものについて、その喪失や不足を、ありあまるほど満たしてくださるのです。

ところで、主が子孫に与えてくださると言われているけれども、今はどうなっているの？と思われるかもしれません。それは、イスラエル人がそこに住んでいることで、証しされています。私も、そこに行きましたが、イスラエル人の住宅地があります。けれども、完全な成就是将来、キリストご自身が再臨されて、神の国を建てられる時に実現します。

¹⁸そこで、アブラムは天幕を移して、ヘブロンにあるマムレの櫨の木のそばに来て住んだ。そして、そこに主のための祭壇を築いた。

アブラムは、主の幻に勇気を得ました。彼は他のところも歩いていきました。ヘブロンは、ベテルからは 70 キロぐらい南にあります。そこに、再び、櫨の木がありました。祭壇でいけにえを献げます。マムレは、そこに土地を所有している人で、アブラムと盟約を結んでいると14章13節にあります。そして、マムレの櫨の木のところで、後に三人の旅人、御使いがやってきます。そして、アブラハムは先立たれたサラのためにその一角を購入し、墓を造ります。

主は、自分が信仰によって動いて行ったところで、確かな証しを与えてくださいます。そこに、主がおられることを知り、安息し、留まるのにふさわしいところにしてくださいます。みなさんには、そういう導き、留まるところがはっきりと分かっていますでしょうか？